コトバの雨

鮎沢琴美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コトバの雨

【Ｎコード】
Ｎ７１３１Ｏ

【作者名】
鮎沢琴美

【あらすじ】
青春キャンバスラブストーリー
超甘々ラブコメになる予定……ならないかもね

#1（前書き）

久々に戻ってまいりましたが
誰にも存在を知られていないと思うので
はじめましてのご挨拶m（＿＿）m
少しでも読んでいただければ幸いです。

#1

（うわ……すごい）

響子が見たものは満天の星空でも斬新な手品でもなく、ただただ広い大講義室と溢れんばかりの人、人、人である。

これからここで学ぶのだと思うと響子の心は期待半分、不安半分……正直に言えば不安九割九分なのである。

大講義室の扉の前でボーっと立ち尽くしていると案の定人とぶつかる。何人も何人もぶつかる。満員電車という言葉が響子の頭にポッと浮かんだ。

ぶつかるけど別に謝らないし、ぶつかるのが当たり前で数秒経ってやっと中に進まなくてはと思い出したように歩を進める。

数ヶ月前には考えられなかった世界が今目の前にあって、やはりそれは九割九分の不安で占められている。

講義室の長机は一台に五人がけでそれがいくつあるのだろうと数えていた。だから響子は前を向いていなかった。

「あ、ごめん」

優しい男性の声が響子の耳に入ると同時に響子の体のバランスは崩れる。平面だったら良かったのに階段状になった通路のゆるい段に躓きそのまま後ろに倒れる。

（２３、２４……）

結局最後まで長机の数を数え終わることはできず、地面に背中を打った。

「大丈夫？　ごめん、前見てなかった」

数秒経って響子は理解した。人にぶつかって自分は転倒したのだと理解した。

（痛た……）

響子がゆっくり体を起こすと謝罪の気持ちをめいっぱい表情で表した男がいた。
「ごめん、あまりに人が多くて何人いるのか数えてたら君に気づかなかった」
こちらこそ謝罪しなければと響子は思うのだが言葉が出ない。ごめんなさいという言葉が出てこない。
いきなりの転倒にびっくりして響子の鼓動が激しく波打っていた。
口で声も出さずにあうあう言っている響子に男も困った表情だったが、響子が立ち上がるのを見てほっとしたようで
「ほんとごめん、同級生になるんだよね、これからよろしく」
そう言うと男は去っていった。
男が去ると響子の鼓動は収まった、そして数秒経ってぶり返した。
（恥ずかしい、恥ずかしい、恥ずかしい）
ほんの数秒前に入学早々すってんころりんを披露してしまったことに猛烈に羞恥を感じて、スタスタと近くの席に逃げるように座った。
（恥ずかしい、恥ずかしい、恥ずかしすぎる、でも落ち着け、落ち着け私）

「見ちゃったよ、これであんたは人気者だ」
いきなり横から声がしてまたびくんと響子の心臓が跳ねる。
「あんまり気にすんなよ。いい思い出だよ、将来、面白エピソード選手権に出場したらいいところまでいけるって」
なんと返していいかわからずに響子はおそらく自分とまったくタイプの違うであろう女性の顔をじっと見つめていた。
「そんなに見なくても……私はカエデ、植物の楓って書く。隣に座った縁だ、今日から私とあんたは友達。名前は？」
初対面なのにズバズバこっちの領域に入ってくる楓に響子は戸惑った。やっぱり違うタイプだと感じた。
「響子、響く子」

この部屋の活気に埋もれそうな小さな声で響子は自己紹介した。漢字の紹介は楓を真似した。
「響子ね、わかった。よっしゃ、友達ができた」
まだ響子は条約を結んだわけではなかったが、おそらく強制締結になるだろうと思った。そしてそれでいいと思った。そのくらい楓にはパワーがあった。響子自身にはない上向きのパワーを感じられずにはいられなかった。
「さっき転んだの大丈夫だったの？　それにあの男も変なこと言うよね、人を数えてたって。数えてどうするんだろうね」
「私も」
「え？あんたも数えてたの？　」
「机」
「机？」
楓がにやけながら言った。
「流行ってるんだね、数えるの」
響子は恥ずかしくなって下を向いた。恥ずかしさが今日一番高まった。ちょっとからかいすぎたと思った楓が響子の頭をポンポンとする。
「ごめんごめん」
そして感心したように楓が言った。
「選手権優勝できるかもね」
すぐのタイミングで壇上からマイクを通した声が室内に響いた。

#2

「君たちの未来へつながる手助けを我々……」
延々続く学長のあいさつのなか、響子は改めて人の多さに静かに驚嘆していた。
拍手の音が鳴り響く。やっとあいさつが終わったようだった。

「長い長い、わかってはいるけどやっぱりつまんない話は聞いてらんないよ」
楓が大きな独り言のようにつぶやく。拍手が鳴りやんだとたん、ざわざわ聞き取れない声の集合体でうるさい。楓くらい声をはりあげないとまともに会話もできないくらいだ。
「そういえば、響子はどこから？　」
どこ、と聞かれたからどこ出身かを答えればいいと当たり前のことを響子は心の中で変換した。
「ふうん、そうなんだ、なんて高校？　あ、高校聞いてもわかんないか」
自分の発した言葉が楓に届いていて響子はほっとした。あまりの声の大きさの違いに会話が成立しているのが不思議だった。
それと高校という響きに響子はなぜか緊張した。理由はわかっている。それをかき消すように逆に響子は楓に質問した。
「か、楓さんは……」
「楓でいいよ、カ・エ・デ」
「どうしてここを選んだの？　」
すると楓は表情をゆがめてどこか照れくさそうにした。
「あ、それは……ま、まあ文学が好きっていうか、えーと……」
明らかに不自然な楓の振る舞いに響子は何と言っていいか分からなかった。
「そ、そっちは？　やっぱ文学が好きで？　」

響子は逆に質問返しされてしまった。
「もちろん、文学は好きだけど……なんていうか言葉が好きかな」
「言葉？　」
「うん、なんでもいいんだけど元気くれる言葉とか綺麗な言葉とかそういうのわくわくするんだよね」
響子は自分の口調がはつらつとしていることに驚き少し恥ずかしく感じた。
「言葉オタクか……やっぱ変ってるね、あんた、前より気に入った」
前ってまだ出会って数十分もたってないのにと響子は思った。
「私もあるよ、好きな言葉」
「え？　何？」
「言葉っていうか名言っていうのかな……ちょ、ちょっとどうしたの？　」
響子は必死に自分の鞄をあさってメモ帳とペンをとりだした。
「何？　メモるの？　」
響子はコクンと頷いて楓をじっと見た。
「あんたは記者か」
楓は呆れたように笑った。
「私の好きな言葉はね、『人生において無駄なことは二つだけある、ひとつは過去を後悔すること、もうひとつは未来を不安に思うこと』そんでこれが私のポリシー」
楓の雰囲気をそのまま表したような言葉だと響子は思った、そしてしっかりメモった。
（そのとおりだ）
「あれ、楓、ここにいたのか、探したぞ」
背後からいきなり男の声がして二人は同時に振り返った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7131o/

コトバの雨

2010年11月8日01時25分発行